大　分　県

豊肥振興局 農山村振興部　　林業・木材・椎茸班　副主幹

渡　邊　　芳　郎

竹田市原木乾しいたけ生産拡大に向けた原木供給の取り組みについて（これまでの実績及び課題と３年目の普及活動）

１　テーマの趣旨・目的

本県は古くから原木乾しいたけ生産が盛んであり、生産量・質ともに全国一である。しかし、生産者の高齢化が進み生産量は年々減少している。

その中で、当管内は本県でも有数の産地であり、その原木となるクヌギ林は山林全体の約２割を占めている。しかし、しいたけ生産量の減少に伴い、大面積のクヌギ林ほど使われずに放置され高齢級化が進み、ナラ枯れの発生リスクの高まりや里山の環境変化による希少生物の生息域の減少等が問題となりつつある。

写真①　高齢級のクヌギ林

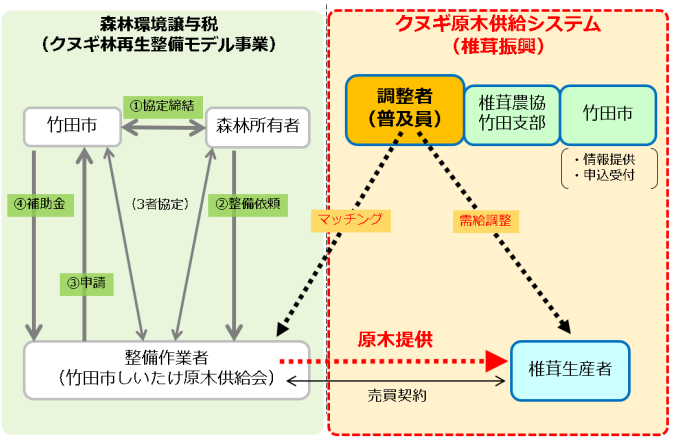
そこで、竹田市では高齢級のクヌギ林を更新・整備するために、森林環境譲与税を活用した新事業（竹田市クヌギ林再生整備モデル事業（補助事業））をR3年度から開始したところである。これにより、未整備森林が解消されるとともに、副次的にクヌギ材が得られることから、モデル事業と連携を図り、発生材の一部をしいたけ生産者に供給することで、しいたけ生産の拡大を図ることを目的としている。

２　現状及びこれまでの取組の成果・課題

（１）現状

今回は前回報告（R3年度）に引き続き、３年目の普及活動とこれまでの実績及び課題について、経過報告する。

（２）取組内容



図①　取り組みの概要

R3年度から現体制で取り組みを開始し、高齢級クヌギ林の更新・整備については、モデル事業を円滑に実施できるように、市と連携して対象林の選定等のサポートを行った。

また、原木供給については、市のモデル事業と連携し、双方の取組の全体のコーディネート役として、関係者（市、椎茸農協、伐採者）との連絡調整及び原木販売の需給調整、さらに購入者（椎茸生産者）に対する聞き取り調査などを行った。

（３）成果

クヌギ玉切り原木を椎茸農協組合員向けに、Ｒ３年度及びＲ４年度に毎年約２万玉を供給するとともに、高齢級クヌギ林約8haを更新・整備することができた（Ｒ５年度も同規模で実施予定）。

一方、Ｒ３年度の原木購入者 16 名について、植菌規模を調べてところ、大きく３万駒以下の小規模生産者と 10 万駒以上の大規模生産者に分かれ、二極分化していることがわかった。

購入者	年齢	購入本数（本）	原木購入の割合 (植菌数ベース) (%)
購入者１	70代	50	100.0%
購入者２	70代	100	100.0%
購入者３	60代	300	100.0%
購入者４	70代	400	66.7%
購入者５	60代	400	26.7%
購入者６	70代	500	100.0%
購入者７	70代	500	50.0%
購入者８	60代	1,000	100.0%
購入者９	30代	1,000	10.0%
購入者１０	70代	1,000	12.1%
購入者１１	60代	1,000	15.0%
購入者１２	70代	1,500	100.0%
購入者１３	（企業）	2,000	52.4%
購入者１４	70代	2,500	100.0%
購入者１５	60代	2,500	25.0%
購入者１６	70代	6,000	100.0%
計		20,750	

植菌規模：　10万駒以上　3～10万駒　3万駒以下

図②　令和3年度の原木販売の実績

図③　1年間の流れ

さらに、Ｒ４年度実績から、玉切り原木販売数を元に植菌数（種駒数）を推定し、竹田市全体の種駒販売数（椎茸農協）と比較したところ、玉切り原木に相当する植菌数（推計）は全体の約５％に相当していることがわかった。あわせて購入者への聞き取り調査から、生産意欲があるにもかかわらず、高齢化による体力低下のため、栽培が困難になった生産者を本取組が底支えしている実態が確認できた。

（４）課題

１）購入者に対して聞き取り調査を行ったところ、本取り組みに対して、肯定的な意見が多く、次回購入への多くのリピーターが予測された。このため、当初は供給原木の不足が懸念されたが、実際に募集を始めてみると、申込数は予想に反して低迷した。

この理由について購入者（生産者）に聞き取りした結果、「自分の体が動くうちはなるべく自分で伐採したい」という思いが強いため、毎年２万玉規模の供給を維持していくことは容易でないことがわかった。

２）一部の購入者から、原木の品質面でのクレームが寄せられた。具体的には「自分が思っていた木と違う（曲がった小径木が多い）」などであり、対策としては、事前に原木（実物）又は伐採前のクヌギ山を購入希望者に見てもらう方法が想定される。しかし、現体制では人員的に難しいことと、実際に対応できたとしても、特定の原木（山）に希望が集中して、収拾がつかなくなることが懸念される。

写真②　曲がった小径木に偏る場合がある

３）原木の形状以外の品質面（ホダ付き・発生状況）が未検証であること。

４）原木供給体制の役割分担が未完成であること。（需給調整役が不在）

課題		解決の方向	具体的な対策
課題１	購入者のリピート率	営業活動	現場巡回時における購入者の継続的な掘り起こし （普及員・市・椎茸農協）
課題２	購入者からのクレーム対応	事前周知	購入希望者に対して、供給原木の特性を十分に説明し、納得のうえ購入してもらう （普及員・市・椎茸農協）
課題３	原木品質の検証	追跡調査	ホダ木のホダ付き・発生量の調査 （普及員・広域普及員）
課題４	役割分担の明確化	需給調整役(候補者)との協議	調整役(候補者)との協議を継続し、正式決定するまでは普及員が役割を代行する （普及員）

図④　普及員が行う対策

３　今後取組むべき内容

①具体的手法又は検討方向

１）原木購入者を効率的に確保するため、働きかけの対象を生産者の中でも、特に「高齢者」「新規参入者（山を持たない人）」「規模拡大を目指す人」「大規模生産者で原木が足りない人」に絞り込む。

２）購入希望者に供給原木の特性を十分に説明し、理解・納得して購入してもらえるように、周知段階の配付チラシの内容をわかりやすく改善する。

３）今年の秋から R3 販売分のホダ起こしが始まるので、県試験機関と連携し、腐朽状況及び発生状況の追跡調査を行う。

４）原木供給体制の安定的な運営に向け、普及員が中心となり、早期に需給調整役を確保する。

②理由

現体制下で原木供給の取り組みを開始して３年目となり、精査・検討すべき課題が多い中で、新たな課題も明らかになったことから、将来安定した取り組みとするためには、引き続き情報収集を徹底し、関係者間で連携して継続可能な体制を構築したい。

③期待する成果

本取組により、乾しいたけ生産の作業の分業化・効率化が進むことで、高齢化で栽培が困難となった生産者を底支えし、さらに新規参入者等への担い手育成の手法として期待できるとともに、高齢級のクヌギ林を適正に更新し健全化を図ることができる。